

## Z118b 古星図における星マークのデザインに関する調査

福田尚也（岡山理科大学）、森下天晴（あすたむらんど徳島／岡山理科大学）

星は星マークで表現されているが、なぜ星を五角星で表現するようになったのかは諸説ある。星印を意味するアスタリスクにおいても線分が5本のもものと6本のもものが存在する。文字としては、メソポタミア文明における楔形文字を組み合わされたり、エジプト文明における象形文字ヒエログリフにもみられ、一概に星マークといっても多様である。本研究では、星マークのデザインの原典や発展に迫るべく、さまざまな古星図にて、星がどのようにデザインされてきたかを調査した。今回、調査の対象としたのは、ピッコローミニ、バイエル、シラー、ヘヴェリウス、フラムスティード、ボーデ、ジェーミソンの星図である。

1543年のピッコローミニの星図では、星の明るさを、星の大きさと星マークの頂点の数を変えて表現している。星の書き分けはアルマゲストに記載されている等級と一致していた。1603年のバイエルのウラノメトリアでは、星のデザインは明るさによらず一貫している。明るい星ほど、星が大きく描かれており、等級が1等違うと面積が約2倍ずつ異なるようにデザインされていた。1627年のシラーの星図では八角星と六角星と五角星、1687年のヘヴェリウスの星図では八角星と六角星が基本デザインであった。1729年のフラムスティードの天球図譜では、より多くの暗い星がプロットされることになった。このため、従来より星の形のデザインを増やしたと考えられる。天球図譜の第1版では印刷過程においてか、星のデザインと等級に混乱があったように見え、北天と南天の全体図においても統一性がない。1822年のジェーミソンはフラムスティードの天球図譜の第3版のデザインを踏襲していた。総じて星の書き分けに関して独自性が高く、オリジナルなデザインに対するこだわりが感じられる。